

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Dentalibialization during tang times as seen from transcriptional sources : appendix: denasalization of the ri-initial

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 貴子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2578">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2578</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 対音資料から見た唐代の軽唇音化について

## 附論 日母の脱鼻音化\*

橋本貴子

### 1. はじめに

対音資料は資料成立時の発音を直接かつ比較的忠実に反映しており、音価推定の重要な手掛かりとなりうる。但し、対音資料から観察できる当時の漢語の発音に関する情報は、対応先の言語の音韻体系または表記体系を通して得られる部分に限られる。また対音資料の音声表記はあくまでも近似的なものにすぎず、必ずしも漢語の細かい発音の違いを区別できているとは限らない。従って、音韻体系の復元を課題とし、厳密性や体系性を重視する従来の中古音研究では、韻書や音義書の反切、韻図等のように、音韻体系全体を網羅的に示す資料を主として用い、対音資料はどちらかという補助的な資料として扱われてきた。

だが、音韻体系全体の復元を目指すのではなく、音韻・音声変化の具体的な様相の解明を課題とするのであれば、限定的あるいは近似的ではあっても発音を直接的に反映する対音資料のほうが有利な場合がある。重要なのは、対音資料の性質を理解し、それに起因する限界を認識した上で、有効かつ適切に音韻史研究の場に活かすことである。

以上の考えに基づいて、本稿では初唐期（618～712年）前後における軽唇

---

\* 本稿は日本中国語学会第69回全国大会（お茶の水女子大学；2019年11月3日）における口頭発表をもとに大幅な加筆・修正を加えたものである。発表の司会を担当してくださった吉川雅之先生、発表の席上で貴重なコメントをくださった平田昌司先生、発表の前後に貴重なご助言をくださった太田齋先生にこの場を借りて感謝申しあげる。また原稿を読んでくださり、ソグド語関係資料や漢訳マニ教文献の扱いについてご指導くださった吉田豊先生に心より感謝申しあげる。なお本稿は日本学術振興会令和元年度～令和2年度科学研究費補助金研究活動スタート支援19K23046：研究課題「対音資料による唐代音韻史の研究——初唐期を中心に」による成果の一部である。

音化の進行状況について、反切資料を用いた従来の研究成果を参考にしつつ、積極的に対音資料を活用して検討を行う。同時に、この問題に対する対音資料の有効性と限界とを明確にすることで、唐代の音韻・音声変化に関する議論をより厳密なものにすることを旨とする。

## 2. 軽唇音化の発生時期

『切韻』では重唇音と軽唇音の区別がなく、唇音声母は幫母、滂母、並母、明母の4声母であった。唐代以降の北方音ではこれら4声母が3等C類（即ち東三、鍾、微、虞、廢、文、元、陽、尤、凡）の諸韻において唇齒音に変化し、非母、敷母、奉母、微母となって分化した。これを軽唇音化と言う。但し明母から微母への変化はやや特殊であり、東韻3等および尤韻では明母のまま変化しなかった。

この軽唇音化は、3等C類が重紐B類と合流したことに関連して起きたものである。韻母におけるC類とB類の合流により、牙喉音の場合にはC類音節とB類音節とが全く同音となったが、唇音の場合はC類において軽唇音化が生じたため、それまで韻母が担っていた音韻的区別を声母が担うことになり、音節全体としての区別はなお保たれていた<sup>1</sup>（平山 1967: 224-225）。

### 2.1 8世紀の状況

8世紀以降の北方音において軽唇音化が起きていたことは、諸資料における反映からほぼ確実である。

#### 2.1.1 反切資料

8世紀の反切資料では重唇音と軽唇音が明瞭に区別されていることから、当時の中国北方ではすでに軽唇音化が起きていたと考えられている。

例えば、慧苑『新訳大方広仏華嚴経音義』（720年頃成立。以下『慧苑音義』）の反切<sup>2</sup>、敦煌出土『毛詩音』残卷（7世紀後半～8世紀前半。以下『毛詩音』）の反切、更に張参『五経文字』（776年）および慧琳『一切経音義』（810年成立。以下『慧琳音義』）の反切では重唇音と軽唇音が区別されている（『慧

<sup>1</sup> C類とB類が合流した頃、恐らく平行して重紐A類と4等韻の合流も生じていた。これら二方面における合流の結果、牙喉音ではC類・B類対A類・4等韻という二項対立、唇音ではC類（軽唇音）対B類対A類・4等韻という三項対立がそれぞれ形成された。軽唇音化はこれら体系的な音韻変化の一環であったと言えよう。

<sup>2</sup> 『慧苑音義』の反切に唇音軽重の混用が全くないわけではない。苗昱 2005: 43によると、『慧苑音義』には反切上字における唇音軽重の混用が5例見られる。即ち、滂敷1例：剖（藩補）、並奉1例：贖（扶忍）、明微3例：靡（亡彼2例）、免（亡辯）。

苑音義』は水谷 1959 : 186、苗昱 2005 : 43、苗昱・陶家駿 2005 : 76、『毛詩音』は平山 1967 : 220-221、『五経文字』は邵榮芬 1964 : 218-219、『慧琳音義』は黄淬伯 1931 : 30a-31b の表をそれぞれ参照)。

軽唇音化に関する諸問題を専門的に論じた平山 1967 は、軽唇音化が音韻変化として確立していたかどうかを論じるには、反切上字における重唇音と軽唇音の区別だけでなく、反切下字における B・C 類合流の有無をも併せて見る必要があるとして、以上の諸資料における軽唇音化について次のように考察している。『慧苑音義』および『毛詩音』では反切下字において B・C 類の合流が部分的にしか見られない。従って、これら資料の依拠した方言での軽唇音化は未だ音声段階に止まっており、音韻的な軽唇音化ではなかったと考えられる。一方、8 世紀半ば以降の成立である『五経文字』および『慧琳音義』では、反切下字において B・C 類の合流が認められる。よって、これら資料の依拠した方言では軽唇音の音韻的独立が生じていたと言える (平山 1967 : 219-223)。

また軽唇音化の年代について論じた潘悟云 1983 も、『慧琳音義』と『五経文字』の反切に基づいて、8 世紀中葉には重唇音と軽唇音が分化していたと推定している (潘悟云 1983 : 23-24)。

## 2.1.2 対音資料

8 世紀の西北方言を反映する対音資料においても、軽唇音化の反映が明瞭に認められる。対音資料を活用して唐代音韻史を研究した Maspero 1920 は、敦煌発見の漢訳マニ教文献 (8 世紀初頭) の音訳讃歌に見える以下の音訳<sup>3</sup>において、敷母字「拂」が中世イラン語の [f] に対応していることを指摘した。

「阿拂胤薩」 'prynsr [āfrīnsar]<sup>4</sup>

「拂多誕」 hft'd'n [haftādān]<sup>5</sup>

<sup>3</sup> 2 例とも敦煌発見の『摩尼光仏教法儀略』(開元 19 年 (731 年) 訳) に見える音訳である。これら音訳が対応する中世イラン語の語形(マニ文字の転写形式、再構された中世イラン語(中世ペルシア語またはパルティア語)の発音形式)については、吉田 1986 のリストに依った。吉田 1986 は上記資料を含む敦煌出土の漢訳マニ教文献 3 点に見える漢字音訳された中世イラン語およびアラム語の単語について、網羅的な収集、整理を行っている。

<sup>4</sup> イラン語の音素 /f/ は、マニ文字では、特に中世ペルシア語では文字 p で表記される。'pryn [afrīn] の場合、マニ文字 p が [f] であることは古代イラン語の語源から明らかであるとのこと。ご教示くださった吉田豊教授に感謝申しあげる。

<sup>5</sup> 吉田豊教授のご教示によると、「拂多誕」はソグド語にみられる 'ft'd'n のような発音を表していると考えられるが、そのソグド語形は中世ペルシア語の hft'd'n に基づいていると推定されるとのこと。ご教示くださった吉田豊教授に感謝申しあげる。

そして、Maspero 氏は 7 世紀前半には長安および中国北方地域で軽唇音化が起きていたと推定した (Maspero 1920 : 38-39)。8 世紀初頭の資料を根拠に軽唇音化の年代を 7 世紀前半と推定することが適切であるかは疑問だが、以上の音訳例は 8 世紀初頭における軽唇音の唇歯音化を支持しうる。なお、これらの音訳例について、平山 1967 は「音声的な意味での軽唇音化と解すべく、慧苑音義の時期と大体一致している」(平山 1967 : 222、注 4) と考えている。

Maspero 1920 が挙げたのは「拂」の 2 例のみであったが、吉田 1986 によって更に多くの軽唇音字が中世イラン語の f に対応する例を確認することができる。以下、吉田 1986 のリストより例を示す。

非母：「阿富覽」'fwr'm [āfurām]  
 「遏啗以弗哆」'rd'wyft [ardāwīft]  
 「佛晒不哆」frhyft [frihīft]  
 敷母：「俱孚」kwf [kōf]  
 奉母：「佛夷瑟德」fryštɡ [frēštɡ]

微母はイラン語の母音に後続する b に対応する。吉田 1986 のリストより例を挙げる。

微母：「阿勿」'br [abar]  
 「泥萬」dyb'n [dibān]  
 「呼味無娑矣弗哆」hw'bs'gyft [huabsāgīft]

微母字に対応する b はいずれも母音の後に位置している。中世ペルシア語の音素/b/は、母音等の有声音の後で摩擦音[β]で発音されていたと考えられている (Boyce 1975 : 16)。従って、以上の例における微母字「勿」「萬」「無」は実際には[β]に対応しており、微母が唇歯音化を経て更に脱鼻音化していたことを示している。

8 世紀以降の梵漢対音にも軽唇音の唇歯音化の反映が見られる。例えば『慧苑音義』(720 年頃) の注釈に見える正梵音では、Sanskrit (以下 Skt) の両唇音を重唇音字で音訳し、軽唇音字を対応させていない。そして Skt の v を並母と奉母とで音訳する (水谷 1959 : 216-218)。また不空 (705~774) の音訳漢字では、Skt の両唇音は重唇音字で音訳され、Skt の v は軽唇音字 (主に奉

母、微母)で音訳される<sup>6</sup>(刘广和 1984: 47-48; 刘广和 2002: 40-42)。これらの音訳状況も軽唇音の唇齒音化を反映したものと考えられる。なお不空の音訳漢字で微母字が Skt の *v* に対応するのは、微母が唇齒音化の後、更に脱鼻音化<sup>7</sup>していたことを示している。

開元 22 年 (734) のトゥルファン出土文書に見える「骨邏拂斯」(国家文物局古文献研究室等(編) 1990: 104; Kasai 2014: 129) は古代トルコ語 *qulayuz* の音訳である。敷母字「拂」が *v* に対応しているのが注目される。

ソグド文字で漢字音を表記した資料のうち、8 世紀前半の成立と考えられる資料では、微母がソグド文字の  $\beta$  で、非母と奉母が補助記号を伴う  $\beta$  で表記される<sup>8</sup>(吉田 1994: 353)。これらの表記は漢語の軽唇音が唇齒音的に調音されていたことを明確に示している。

以上の他、チベット対音資料(9 世紀以降)、ウイグル漢字音資料(9 世紀以降)やコータンのブラーフミー文字資料(10 世紀以降)にも軽唇音化の反映が見られるが、これらは以上の諸資料よりもやや遅い時期のものであるため、具体例の紹介は省略する。

## 2.2 8 世紀以前の状況

### 2.2.1 反切資料

反切において重唇音と軽唇音を区別する傾向は、南北朝期～初唐期の江南地域で成立した資料においてすでに見られる。

例えば、顧野王『玉篇』(543 年)、曹憲『博雅音』(7 世紀初頭)、『文選音決』(7 世紀頃)の反切では、明母と微母を除き、重唇音と軽唇音とを区別する傾向が強い(周祖謨 1936: 305-306、河野 1937: 49-55、丁鋒 1995: 7-12、

<sup>6</sup> 刘广和 2002: 48 は不空の頃の奉母と微母をともに *v*-と推定するが、これは疑問。私見によると不空訳『仏母大孔雀明王経』(T19, No. 982)では奉母字と微母字はともに *v* に対応するが、この両声母は決して混用されているわけではなく、相補い合う形で Skt の *v* の音訳に用いられている。この資料において Skt の *v* は多くが微母字で音訳され、奉母字の例は「吠」*ve*、*vai*に限られる。本来、*ve*、*vai* は蟹摂の微母の字によって音訳するべきだが、蟹摂には微母字が存在しないので、代わりに廢韻奉母字の「吠」を用いたのだと思われる。また、多くの現代北方方言では奉母と微母を区別するので、不空の時期にこれら 2 声母が合流していたと考えるのは、音韻史的観点から見ても適切ではない。

<sup>7</sup> 不空の音訳漢字には微母だけでなく鼻音声母全般において脱鼻音化の反映が見られる。この種の反映が 700 年前後から見られるようになったことについては、橋本 2007 を参照。なお、本稿で言う「脱鼻音化」は、研究者によって“denasalization”、「鼻音弱化」、「鼻音の弱まり」、「非鼻音化」等と呼ばれる。橋本 2007 では「非鼻音化」と呼んでいるが、本稿では“denasalization”の日本語訳としてより適切な「脱鼻音化」を用いることにした。

<sup>8</sup> ソグド文字の  $\beta$  は無声音、有声音のどちらも表しうるが、特に無声音を表す場合に補助記号を用いていた。従って、この資料では  $\beta$  は漢語の [v] を、補助記号付きの  $\beta$  は [f] を表していたと考えられる(吉田 1994: 353)。

大島 1985 : 48-51、狩野 2000 : 179-180)。また『經典釈文』(6世紀末頃成立)の唇音反切について統計的研究を行った王怀中 2006 は、『經典釈文』反切の中でも陸徳明による反切では幫滂並と非敷奉の混用が 5%に満たないことから、非敷奉の三声母についてはすでに分化していたとし、明母と微母については両声母の混用が 40%以上に上るため、まだ未分化であったと考えている<sup>9</sup>。

しかしながら、以上の諸資料に見られる重唇音と軽唇音を区別する傾向が軽唇音化、即ち軽唇音の音韻的独立の反映と言えるかについては慎重な見方がある。潘悟云 1983 : 23 は『經典釈文』において重唇音と軽唇音を区別する傾向が見られないと考えており、それより成立が約 40 年早い『玉篇』の唇音反切に見られる傾向は軽唇音化を支持するものではなく、反切作成における介音の調和現象に過ぎないと主張する。

初唐期の北方で成立した反切資料における軽唇音化の有無についても見解が分かれている。

顔師古『漢書音義』(641 年成立)の音注では、明母・微母を除き、重唇音と軽唇音を区別する傾向が強い(大島 1971 : 3-6 ; 大島 1987 : 55)。大島 1971 : 6-7 は『漢書音義』における上記の傾向に加え、B・C 類の通用が広範に見られるとして、初唐期の中国北方においてすでに音韻レベルでの軽唇音化が起きていたと考えた<sup>10</sup>。だが後に大島 1987 : 65 では、『漢書音義』における B・C 類の通用は徹底した併合の様相を呈するものではなく、また重唇音と軽唇音の混同例も見られることから、初唐期における軽唇音の音韻的独立には消極的な見方を示している。

7 世紀半ばに成立した『玄応音義』の反切については、例えば、王力 1980 : 19 は唇音の軽重を混用する反切が見られるとして、軽唇音の独立を認めない。一方、周法高 1984 : 204 は軽唇音全体に独立の傾向があるとして、音価を pf、pf<sup>-</sup>、bv<sup>-</sup>、mv<sup>-</sup>と推定する。王曦 2016 は『玄応音義』の反切を複数の方法で分析し、更に旧来の音訳に対する玄応の批判や修正の状況も考え合わせて、軽唇音は独立していたが一部はまだ混じていたと考えている。

<sup>9</sup> 他方、『經典釈文』反切中の陸徳明以前の諸家による反切では、幫滂並と非敷奉の混用が 50%以上、明母と微母の混用に至っては 70%近くもあるという。王怀中 2006 : 436、表三を参照。

<sup>10</sup> 龍異騰 1998 は顔師古『漢書音義』の反切において重唇音と軽唇音の分化(明母と微母は除く)を認める他、初唐期の李賢『後漢書音義』、司馬貞『史記索隱』、張守節『史記正義』の反切にも、程度の差こそあれ、重唇音と軽唇音を区別する傾向を見出している。但し、龍異騰 1998 が重唇音と軽唇音の分化の傾向を認める基準は、各資料における重唇音と軽唇音の混用率が『広韻』のそれと比較して低い点にある。龍異騰 1998 の結論はともかく、その議論の方法には疑問が持たれる。

平山 2006 : 22-23 は唐代以前及び唐初の反切において重唇音と軽唇音が区別される傾向について、音声的な軽唇音化がすでに相当明瞭になっていたことの反映と解釈できるものの、軽唇音が音韻的に独立していたかについては、音韻体系全体の状況を考慮して判断すべきであるとして懐疑的な態度を示している。

上述したように、軽唇音の音韻的独立は B・C 類の合流に伴って生じたとされる。管見の限りでは、唐代以前及び初唐期の反切における B・C 類の大幅な通用は一般には認められていない。よって、唇音反切における重唇音と軽唇音を区別する傾向のみに基づいて、当時における音韻的な軽唇音化の有無を議論することには問題があると思われる。

仮に重唇音と軽唇音を区別する傾向を認めるとしても、それが果たして反切作成における調音上の工夫にすぎず、唇歯音化さえも意味しないということなのか、或いは唇歯音化はしていたが未だ音素にはなり得ていない状態（即ち音声的な軽唇音化）を反映するものか、反切から具体的に推定することは困難である。反切は漢字で表記されたものであるため、音価に関する情報を直接得ることができないからである。

更に反切は踏襲が行われやすく、それらが資料成立当時の発音を反映すると見なしてよいかという問題もある。太田 1998 は『玄応音義』が書名を提示せずに『玉篇』の反切を大量に引用していることを指摘し、引用の結果として『玉篇』が反映する江南讀書音の特徴が現れることになったと説明する<sup>11</sup>。唇音反切については、重唇音と軽唇音の区別を示す反切のうち『玉篇』反切と一致する反切の割合は高くないとのことであるが（太田 1998 : 17）、それでもそれらの反切が『玄応音義』成立当時の発音を忠実に反映しているとは言い切れない。他の反切資料についても同様の疑問を払拭するのは難しいと思われる。

このように反切資料のみによって 8 世紀以前における軽唇音化の問題を論じることには大きな限界がある。

## 2.2.2 対音資料

### (1) 7 世紀初頭以前

北周・隋（556～618）の梵漢対音では Skt の両唇音（p、ph、b、bh、m）を重唇音字と軽唇音字とで音訳していることから、当時音訳に用いられた長

<sup>11</sup> 更に太田 2019 は『玄応音義』に『切韻』と一致する反切が見られることを指摘し、玄応が『玉篇』反切のみならず『切韻』をも書名を挙げずに引用した結果、『玄応音義』の音韻体系と『切韻』の音韻体系が酷似するに至ったと考えている。



安の発音では重唇音と軽唇音はまだ分化していなかったと考えられている(尉迟治平 1982 : 21)。また Coblin 1991 a は闍那崛多 Jñānagupta の音訳について、(1)Skt の *v* が概して並母字で音訳される点、(2)Skt の *-bhyan-*に対する音訳「便」に「扶延」と反切が付されている点を指摘し、重唇音と軽唇音の音韻論的な対立はまだ生じていなかったと考えている<sup>12</sup>。

6 世紀後半のソグド語=漢語バイリンガル墓誌に見えるソグド人名の漢字音訳からも、当時軽唇音化以前の段階にあったことが知られる。

北周大象二年 (580) 『史君墓誌』<sup>13</sup>

rštβntk (Rashtyantak) = 「阿史盤陀」

βr'yšmnβntk (Vrēshmanvantak) = 「毗沙」

pr'wtβntk (Frōtvantak) = 「富鹵多」

北周大象二年 (580) 『遊娑娑槃陀及妻康紀姜墓誌』<sup>14</sup>

nnyβntk = 「娑娑槃陀」

mwp'yn = 「武平」

『史君墓誌』における「毗沙」とソグド語形 *Vrēshmanvantak*<sup>15</sup>の前半部分との対応は不完全であるが、一応取り上げておく。この資料の「阿史盤陀」と「毗沙」では並母字「盤」「毗」がソグド語の β [v]に対応する。この対応

<sup>12</sup> 一方で Coblin 氏は、闍那崛多訳が Skt の *pu* や *bu* に対して軽唇音字を用いず、重唇音字で音訳する傾向があることに注目している。例えば鳩摩羅什 (344~413) 訳『妙法蓮華經』(T9, No. 262. 400 年) の陀羅尼では Buddha を「佛駄」と音訳するが、これを闍那崛多・達摩笈多共訳『添品妙法蓮華經』(T9, No. 264. 601 年) では踏襲せず「勃地」「菩駄」のように音訳しており、並母字「勃」「菩」を語頭の *b* に対応させている。Coblin 氏はこの傾向が見られる理由として、闍那崛多当時の並母/\*b/は真韻と結合する場合に [bv] となっていたためと推測する (Coblin 1991 a : 14-15)。つまり Coblin 氏は 6 世紀後半に音声的な軽唇音化が一部起きていた可能性を考えている。

<sup>13</sup> 吉田 2016a を参照。丸括弧内は吉田 2016a : 76 に見える簡略表記。なお、『史君墓誌』の漢語部分には、他にも「阿奴伽」*wn'wk* (Wanūk)、「維摩」*δrymtβntk* (Zhematvantak) といったソグド人名の音訳が見られ、吉田 2016a : 64-67 はこれらについて論じている。『史君墓誌』のソグド語部分には *t'y z'nw* = 「大象」、*t'y cw* = 「大周」、*kc'n* = 「姑臧」のようにソグド文字で表記された漢語語彙も見える。*kc'n* はソグド語に定着した地名で、古代書簡にも見られる (吉田 2016a : 74)。

<sup>14</sup> Bi Bo, Sims-Williams, Yan Yan 2017 を参照。このソグド語=漢語バイリンガル墓誌から得られるソグド語と漢語の対応例としては、他にも以下のものがある。*tyntw'n* = 「天通」、*'nkp'* = 「鄴」、*t'(z)'y(n)* = 「大象」、*kyk'n* = 「紀姜」。なお吉田豊先生のご教示によると *'nkp'* = 「鄴」は 4 世紀初めの文書にも現れる形式である。

<sup>15</sup> このソグド語の形式は「毘沙門のしもべ」という意味であるが、音訳では「しもべ」を表す *vantak* が省略されている (吉田 2016a : 65)。

について、吉池 2008 : 14-15 は軽唇音化がまだ起きていなかったためと説明する。また Frōtvantak の音訳「富鹵多」において非母字「富」が f に対応する点が問題となるが、吉池 2008 : 16 は当時の漢語に軽唇音が存在していなかったために、ソグド語 f には漢語の/p-/の字を当てるしかなかったと解釈し、軽唇音化を反映するものではないと考えている。

『遊遼遼槃隋及妻康紀姜墓誌』では並母字「槃」がソグド語の β [v] に対応し、微母字「武」が m に対応している。これらの例も軽唇音化以前の状態を反映したものと思われる。

7 世紀初頭のトゥルフアン出土文書にはソグド人名 nny-prn [Nanaifarn]<sup>16</sup> の音訳「(曹) 那甯潘」が見える。吉田 1989 : 71 はこの音訳と 8 世紀中頃の敦煌文書に見える nny-prn [Nanaifarn] の音訳「(羅) 寧寧忿」とを比較し<sup>17</sup>、farn を表す漢字の違い(滂母字「潘」と敷母字「忿」)から、7 世紀初頭には軽唇音化がまだ起きていなかったと考えている。

以上のように、7 世紀初頭以前の対音資料では外国語の両唇音を軽唇音字で音訳したり、外国語の f や v 等を重唇音字で音訳する状況が見られる。これらは資料が基づいた当時の北方音において軽唇音化がまだ起きていなかったことを示している。

## (2) 7 世紀中葉以降の梵漢対音

時代は下って 7 世紀中葉の玄奘 (602~664) 訳になると、状況が変化する。施向东氏の研究によると、玄奘の音訳漢字では Skt の両唇音 (p, ph, b, bh, m) は一般に重唇音字のみで音訳され、v は従来の並母字に加えて奉母字でも音訳される<sup>18</sup>。並母字で音訳されるのは多くが v に前舌母音が後続する場合で、奉母字で音訳されるのは v に後舌母音が後続する場合である<sup>19</sup>。更に玄奘以前の漢訳仏典で時に Skt の b や bh が奉母字で、v が並母字で音訳されていたのに対し、玄奘『大唐西域記』の注釈ではそれらを誤りであるとし、

<sup>16</sup> ソグド文字の転写形 nny-prn の p は、マニ文字などで f と表記されており、その音価が [f] であったことは間違いないとのこと。ご教示くださった吉田豊教授に感謝申しあげる。

<sup>17</sup> 「(曹) 那甯潘」については国家文物局古文献研究室等 (編) 1981 : 120、李方・王素 (編) 1996 : 329 を参照。「(羅) 寧寧忿」については池田 1965 : 64 を参照。

<sup>18</sup> 玄奘訳では子音に後続する v が合口介音で音訳されることがある (施向东 2009a : 40)。義浄訳でも子音に後続する v は合口介音または匣母合口の声母部分で音訳される (橋本 2019 : 72-73)。

<sup>19</sup> 施向东 1983 : 41-47 および施向东 2009a : 72-79 の表を見ると、vi、ve は確かに並母字で音訳されることが多い。一方、a が後続する場合の v は時に並母字で、時に奉母字で音訳されている。例えば va に対しては「婆」(並母)と「縛」(奉母)、van に対しては「槃」(並母)と「飯」(奉母)など。

自らは前者を並母字で、後者を奉母字でそれぞれ音訳している<sup>20</sup>。これらの点から、施向東氏は玄奘当時すでに軽唇音化が起きていたとする。非母、敷母、微母については音訳例が得られないが、微母は *v* でなかったと考えている（施向東 1983 : 31、施向東 2009a : 23）。

玄奘訳における Skt の *v* に対する音訳の具体的な状況を確認しておくことにしよう。高麗蔵本『玄奘音義』巻 6 所収玄奘訳法華經陀羅尼（線装書局（影印）2004 : 28-29）では以下のように Skt の *v* が並母字と奉母字とで音訳されている。音訳が対応する Skt 語形については Karashima 2001 : 380-392 を参照。

並母：

「勃陀毗盧枳帝」(28c7)<sup>21</sup> *buddhavi*lokite  
「毗緻拏」(28c20) *viṭṭini*

奉母：

「鉢刺著(知也反)吠刹握」(28c1) *pratyavekṣaṇi*  
「惡刹伐拏多耶」(28c12) *akṣayanatāya*  
「十伐唎」(28c16) *jyale*  
「薩嚩婆(去)莎(所也反)伐栗怛泥」(29b3) *sarvabhāṣyāvartane*

Skt の *p* は幫母字で、*b* と *bh* は並母字で、*m* は明母字でそれぞれ音訳されている。

幫母：

「阿踰怛邏波利秣(尸聿反)第」(28c3) *abhyantarapāriśūddhi*  
「鉢刺麟」(28c5) *paraḥ*  
「僧伽波揭低」(29b7) *saṃgāpagate*

並母：

<sup>20</sup> 例えば、以下のような例がある（括弧内の数字は季羨林等（校注）1985 の頁数を表す）。

「瞻部洲(舊曰閻浮提洲，又曰剌浮洲，訛也)」(35) *Jambudvīpa*  
「蘇部底(……舊曰須扶提，或曰須菩提，……皆訛也)」(420) *Subhūti*  
「阿恃多伐底河(……舊云阿利羅跋提河，訛也。……)」(538-539) *Ajitaṣyātī*  
「時縛迦大醫(舊曰耆婆，訛也)」(723) *Jīyaka*

旧来の音訳に対する類似の批判と訂正は、『玄奘音義』にも見られる。王曦 2016 : 717-719 を参照。

<sup>21</sup> 括弧内は線装書局（影印）2004 の頁数、段、行を表す。

- 「勃陁毗盧枳帝」 (28c7) buddhavi lokite  
 「阿跋隸」 (28c13) abale  
 「薩嚩婆(去)莎(所也反)伐栗怛泥」 (29b3) sarvabhāṣyāvartane  
 「阿躡怛邏波利秬(尸聿反)第」 (28c3) abhyantarapāriśūddhi  
 「跋耶(重聲)跋耶(短聲)毗輪達尼」 (28c9) bhayābhayaviśodhani

明母：

- 「末泥(去聲)」 (28b16) mane  
 「目答謎」 (28b19) muktame  
 「三磨(短)三謎」 (28b20) samasame  
 「曼多羅刹也低」 (28c10) mantrākṣayate  
 「摩墜祇」 (29a4) mātaṅgi

但し、次の例では例外的に p を非母字で音訳する。「怛唎阿特縛僧伽咄略(上聲)鉢羅弗(補沒反)帝」 (29b7) は梵本の tri-adhvasaṃgatulyāprāpte または ṭṛ-adhvasaṃgatulyāprāpte (Karashima 2001 : 391) に対応する。この中で -p(t)- が「弗」で音訳され、しかも「補沒反」と反切が付されているのが注目される。「補沒反」は没韻幫母の読みを示しているが、その読み該当する字が没韻に存在しないため、やむを得ず最も近い読みを持つ字である「弗」が用いられたのであろう。この字は玄奘以前の音訳で例えば「舍利弗」śāriputra、「弗沙」puṣya、「弗婆提」pūrvavideha のように p を表すのによく用いられていた。それは当時、「弗」の声母が[p-]であったからに他ならない。もし玄奘の頃も同様に「弗」の声母が[p-]であったなら、そのまま Skt の p を音訳できたはずである。だが実際はそうではなく、わざわざ反切を付したということは、「弗」の声母がすでに[p-]ではなくなっており、Skt の p を表すのに適切でなかったということではないだろうか。

時代はやや下って、7世紀末の菩提流志訳『護命法門神呪經』(T20, No.1139. 長寿二年(693)東都仏授記寺で訳出)では、玄奘訳と同じように v が奉母字と並母字とで音訳されている(李建強 2015a: 54; 李建強 2017a: 34)。更に『不空羂索呪心經』(T20, No.1095. 長寿二年(693)に東都仏授記寺で訳出)では、vo「部」の1例を除き、Skt の v は悉く奉母字「筏」「飯」「防」「吠」「縛」「費」で音訳されている<sup>22</sup>(李建強 2017b: 95; 李建強 2017a: 18)。こ

<sup>22</sup> このような状況は必ずしも同時期に漢訳された他の仏典に共通して見られるとは限らない。提雲般若訳『智炬陀羅尼經』(T21, No.1397. 天授二年(691)大周東寺にて訳出)では v を常に並母字で音訳し、奉母字を用いない。この点について李建強氏は「提云用並母字对, 说明他

れによって李建強 2017a : 20 は重唇音と軽唇音の分化がすでに起きており、奉母は独立していたと考えている。

このように、玄奘以降の梵漢対音では Skt の *v* に対して、北周～隋代の音訳では用いられなかった奉母字で音訳する傾向が見られるようになる。菩提流志訳『不空罽索呪心経』に至っては *v* がほぼ全て奉母字で音訳されている。これらは当時の奉母が唇歯音化しており、Skt の *v* に最も近いと感じられたことを示している。また Skt の両唇音に対する音訳に軽唇音字が用いられることはほぼなくなり、専ら重唇音字で音訳されるようになる。これは間接的にはあるが、奉母に限らず非母、敷母、微母も唇歯音化をすでに開始しており、Skt の両唇音を音訳するのに適さなくなっていたことを示唆している。

### (3) 霞浦文書の音訳讃歌

注目すべきことに、以上と類似する状況が、初唐末期頃の成立と目される別種の言語の対音資料にも見られる。近年、福建省で発見された漢文マニ教文献の資料群である「霞浦文書」の中には、マニ教の讃歌を漢字で音訳した部分が含まれている。この音訳讃歌では中世イラン語の有声閉鎖音を表すのに専ら全濁音字が使われている（吉田 2016b : 34）。この点は玄奘や義浄の音訳漢字において Skt の有声無気音、有声有気音が全濁音字で音訳されるのと一致する。史料によると武后期、すなわち初唐末期にマニ教経典の漢訳が行われていたと考えられ、霞浦文書の音訳讃歌の原本もその頃に成立した可能性がある（吉田 2016b : 35）。

この霞浦文書の音訳讃歌では、非母字「弗」が中世イラン語の *f* に対応する。以下に例を挙げる<sup>23</sup>。

非母：

---

见到的本子，*v* 都读成 *b*」（李建強 2015b : 228；李建強 2017a : 53。日本語訳：提雲（般若）が（*v* を）並母字で音訳しているのは、彼が見た（梵語の）写本では *v* を全て *b* と読んでいたことを物語っている）と説明する。また菩提流志とほぼ同時期に訳経活動を行った義浄（635～713）の訳『仏説大孔雀呪王経』（T19, No. 985。神龍元年（705）東都内道場にて訳出）では、Skt の *v* は並母と奉母とで音訳されるが（刘广和 1994 : 409；王思齊 2015 : 260）、私見では並母での音訳が多いように思われる。

<sup>23</sup> 『四寂讃』は吉田豊 2014、『興福祖慶誕科』は吉田 2016b、『天王讃』は Yoshida 2018 : 35-36 をそれぞれ参照。吉田豊氏による中世イラン語（およびアラム語）への復元は、トルファン出土のマニ文字で書かれた資料に基づいており、更に Karlgren 氏の中古音を参考にして行われたものである。他方、林悟殊氏も『四寂讃』を含む幾つかの霞浦文書中の音訳讃歌について独自の復元案を提出しているが（林悟殊 2016a；林悟殊 2016b；林悟殊 2016c；林悟殊 2016d）、中世イラン語と漢語の間の対応に疑問が持たれるものが時折見られる。従って本稿では林氏の復元案を参考にしていない。

「弗里悉德健那」 frystg'n' [frēstagān-ā] 『四寂讚』  
 「弗囉醯弗多」 fryhyft<sup>24</sup> 『興福祖慶誕科』  
 「弗哩悉德健那」 frystg'n' [frēstagān] 『天王讚』

奉母は f、有声音に後続する b (= [β])、w に対応する。

奉母：

「阿呬哩特」<sup>25</sup> ”frydg [āfrīdag] 『四寂讚』  
 「稽羅縛居」 kyrbg [kirbag] 『四寂讚』  
 「嚧縛逸」 rwf'yl [rufaēl] 『天王讚』  
 「罰悉勒去」 wzrg [wuzurg] 『天王讚』

上述したように中世ペルシア語の/b/は有声音の後で摩擦音化していたから、2つめの例「稽羅縛居」の「縛」は実際には[β]に対応している。

これらの例は非母と奉母がすでに唇齒音化していたことを示している。

なお、この資料では以下のように重唇音字は基本的に中世イラン語の p、b、m に対応する。以下に例を示す。

幫母：

「波耶特」 p'yd [pāyēd] 『四寂讚』  
 「布核囉」 pwhr'<sup>26</sup> 『興福祖慶誕科』  
 「俚特囉」 pydr'<sup>27</sup> 『興福祖慶誕科』  
 「波引」 p'ynd [pāyēnd] 『天王讚』

並母：

「步唎」 bwjyd [bōžēd] 『四寂讚』  
 「蒼和」 bw'[bawā] 『四寂讚』  
 「唯悉伴那」 wysp'n [wispān] 『天王讚』

<sup>24</sup> 吉田 1986：「2. リスト」34 「佛晒不哆」 fryhyft [frihīft]を参照。

<sup>25</sup> 『広韻』では「呬」は奉母であるが、「弗」（非母）に口偏を加えた字と見なす余地もあろうか。

<sup>26</sup> 吉田 1986：「2. リスト」70 「補忽」 pwhr [puhr]を参照。

<sup>27</sup> 吉田 1986：「2. リスト」71 「卑喋」 pydr [pidar]を参照。

明母：

「門乎弥特」 mnwhmyd mr' [manōhmēd] 『四寂讚』

「摩尼」 m'ny [mānī] 『四寂讚』

「彌訶逸」 myh'y[mīhāē] 『天王讚』

「俱滿」 kwm'n [kumān] 『天王讚』

霞浦文書の音訳讚歌においても、このように重唇音字と軽唇音字が使い分けられている。音訳における重唇音字と軽唇音字の使い分けが、ほぼ同時期の複数種の対音資料に共通して見られることは重要である。

初唐期の梵漢対音と霞浦文書中の音訳讚歌における非母と奉母の対応状況を合わせて考えるならば、遅くとも初唐末期までには、唇歯音化がかなりの程度進行していたものと思われる。敷母の例は見当たらないが、非母と奉母と同様に、唇歯音化していたに違いない。

だが、これら対音資料を用いた考察にも、次のような限界があることは認めなくてはならない。

- ① 対音資料において軽唇音字が Skt の *v* や中世イラン語の *f* に対応することから唇歯音化が起きていたことは分かるとしても、必ずしも当時の軽唇音が [f-][v-] のように摩擦音になっていたとは限らない。仮に当時の軽唇音が唇歯破擦音 [pf-][bv-] 等であったとしても、Skt の *v* やイラン語の *f* に最も近いと見なされた可能性が否定できないからである。対音資料が表すのはあくまでも近似値であり、それによって破擦音と摩擦音のいずれであったか推定することは難しい。
- ② 対音資料は漢語の韻母の細かい差異を区別できないので、3等 B・C 類の合流、軽唇音化後の *i* 介音消失については確認できない。従って対音資料から軽唇音の音韻的独立の有無について判断することは困難である。従来の梵漢対音研究では、奉母字が Skt の *v* に対応するのは軽唇音化の反映と考えられてきた。だが厳密には、対音資料から分かるのは「音声的な軽唇音化」つまり唇歯音化までであり、「音韻的な軽唇音化」が起きていたとまでは必ずしも言えない。
- ③ 以上の音訳例に見える軽唇音字は、軽唇音全体から見ればほんの一部に過ぎない。音訳に現れない部分については、外国語の両唇音が軽唇音字で音訳されないという間接的な証拠によって唇歯音化していた可能性が推論できるものの、なお一部の軽唇音が唇歯音化していなかった可能性は否定できない。

### 3. 微母

対音資料における状況から、軽唇音は初唐期に唇齒音化を開始していたと推察される。但し、上述したように明母から微母への変化はやや特殊であり、北方において東韻 3 等と尤韻では[m-]のまま変化していない。北方の常用語彙中でも稀に陽韻「罔」「忘」「望」および微韻「味」の声母が[m-]で現れることがある（太田斎 1999）。またすでに見たように、8 世紀以前の反切資料では明母と微母を区別する傾向が他の唇音声母と比べてそれほど顕著ではないことも注目される。これらのことから、微母の軽唇音化の問題については別に検討する必要があると思われる。

微母は唇齒音化の後、有声摩擦音[v-]や半母音[w-]等に変化する過程で鼻音性を完全に失った。では、初唐期の微母はどのような状態であったのだろうか。他の軽唇音声母と同様に唇齒音化し、摩擦音化していたのだろうか。

残念なことに、初唐期の対音資料中に微母字はほとんど現れない。これまで確認できた微母字はわずかに以下の数例のみで、いずれも外国語の m に対応している<sup>28</sup>。

(1) Mun-chang kong-co; Mun-cang kong-co (650 年以前) = 「文成公主」

Mun-cang kong-co (683 年) = 「文成公主」

以上はいずれも *Old Tibetan Annals* (敦煌発見の『編年記』) に見えるチベット文字による表記である (Coblin 1991a: 18 ; Coblin 1991b : 102)。Coblin 氏はこれらの表記に基づいて、微母が 7 世紀半ばの西北方言ではまだ軽唇音化しておらず[m-]のまま保たれていたと考えている (Coblin 1991b : 102-103)。

(2) 「文睇失里文睇」(T19 : 472a25) muṅḍe śrimuṅḍe/ maṅḍe śri-maṅḍe<sup>29</sup>

以上は義浄訳『仏説大孔雀呪王経』(T19, No. 985。神龍元年 (705) 東都内道場にて訳出) の陀羅尼部分に見える語句である。刘广和 1984 : 409 はこの資料から m に対応する微母字「文」を単独で挙げているが、それは上の音訳例に該当すると思われる。劉氏はこれによって明母と微母が共に m に対応す

<sup>28</sup> Coblin 1991c : 71 は義浄訳『金光明最勝王経』(T16, No. 665。長安三年 (703) 西明寺にて訳し終わる) から微母が m に対応する例として「拘物頭」kumuda を挙げる。しかし、この音訳語は『長阿含経』に出る (辛嶋 1994 : 214) 他、南北朝期の漢訳仏典に多く見られ、義浄訳が既存の音訳を踏襲したことは明らかである。従って、この音訳を義浄訳のデータとして扱うのは適切ではない。

<sup>29</sup> muṅḍe śrimuṅḍe は不空訳『仏説大孔雀明王経』の脚注に挙げられた「東京帝大梵本 No.334」のローマ字転写 (T19: 434, 脚注 1) を参照した。maṅḍe śri-maṅḍe は田久保 1972 : 44 を参照した。



るとし、更に並母と奉母が共に **b** に対応することと併せて、唇音の分化はまだ起きていなかったと考えた（刘广和 1984 : 410）。Coblin 1991c : 71 はこの音訳例に注目しつつも特に解釈は加えず、微母全体については恐らく明母とは何らかの音声的区別があったと考えている。王思齊 2015 は、『集韻』に見える「文」の読みの一つである「眉貧切」（臻開三平真明 B）との関連性を考えている（王思齊 2015 : 260）。また一方で、この音訳は陀羅尼に見える語句であり、既存の音訳を踏襲した可能性が低いことから、義浄訳当時の微母の状態を反映するものとして、微母はまだ明母から分化していなかったと考えている（王思齊 2015 : 261）。

### (3) 「文茶」 muṇḍa（王邦維（校注）1995 : 194）

これは義浄『南海寄帰内法伝』巻4に見える文法書の書名である。

ちなみに、この語は玄奘の伝記である慧立、彦惊『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（688年成立。T50, No. 2053）において「間擇迦」（T50 : 239a18-19）と音訳されている。muṇ を表すはずの「間」は大正蔵本が底本とした高麗蔵本の表記に拠ったものであるが、当然誤字である。金蔵広勝寺本でも「間」と作る（中華大蔵經編輯局（編）1993 : 39）。Brough 1973 は『望月仏教大辞典』の「間擇迦論 muṇḍa」という表記<sup>30</sup>に従って大正蔵本の「間」を「聞」の誤字と考えている（Brough 1973 : 252、脚注19）。王邦維（校注）1995 : 194 も Brough 1973 の指摘を正しいとして、「間擇迦」に作るべきであると言う。もし「間擇迦」が本来の音訳であるならば、外国語の **m** に対応する微母字の例が一つ増えることになる。ちなみに、大正蔵本の「間」に附された脚注8（T50 : 239）によると、校合に用いられた宋本を始めとする諸本では「門」に作るという。宋代には微母が完全に脱鼻音化して[v-]になっており、微母字の「聞」はもはや muṇ を表すのに適切ではないと判断されて明母字の「門」に置き換えられたものと思われる。

### (4) 「勿那」 mn' [man-ā] 『四寂讚』（吉田豊 2014 : 121）

霞浦文書中の漢訳マニ教文献の音訳讚歌に見える語である。「勿」が[m]に対応する例は今のところこの1例のみであり、「母」「毛」のような何らかの明母字の誤写である可能性を否定できないが、今は「勿」と考えておく。吉田 2014 : 116 は当時の微母の音価を[v-]と考え、「勿」が中世イラン語の[m]

<sup>30</sup> Brough 氏が『望月仏教大辞典』のどの版を用いたのかは不明であるが、本稿筆者は増訂版である塚本（編纂）1954 : 4288c に「間擇迦論 muṇḍa」という表記を確認した。

に対応することについて疑問視している。だが後述するように、当時の微母は[mv-]や[v-]ではなかった可能性が高く、また上の3例において微母字「文」が外国語の m に対応していることから、同じく微母字の「勿」が中世イラン語の[m]に対応してもおかしくはない。また733年の資料に見えるソグド人名 Zhēmat の音訳「染勿」（詳しくは後述）も参考になる。

これらの例は微母字「文」「勿」の声母の鼻音要素が十分に保存されていたことを示している。

上で言及した幾つかの研究では、「文」が外国語の m に対応することから、資料成立当時、微母はまだ明母から分化していなかったと考えられている。しかし、以上の限られた例のみから微母全体の状態および音価について結論を出すことには問題がある。なぜなら、対音資料が示すのは近似値であり、以上の例における「文」「勿」が[m-]と[m̥-]のいずれに読まれていたかまでは分からないからである。それに「文」「勿」が [m-]と読まれていた可能性は否定できないとしても、その解釈を微母全般にまで拡大して考えてよいかは疑問である。すでに見たように、梵漢対音と霞浦文書の音訳讃歌において外国語の m は基本的に明母字で音訳されている。もし微母全体がまだ明母から分化しておらず、[m-]のままであったのならば、外国語の m の音訳に微母字が多く用いられても良さそうであるが、実際はそうではない。つまり「文」「勿」が外国語の m に対応するのは特殊な例であると言える。従って、それらを根拠に微母全体を論じるのは適切ではない。

外国語の m が微母字で音訳されないという点から、間接的にではあるが、初唐期の微母は恐らく唇歯音化によって明母とは異なる音として認識されていたと推察される。では、微母はすでに摩擦音化して[m̥v-]や[v-]のようになっていたかという点、そのような発音も一部見られたかもしれないが、微母全体としてはまだそこまでには至っていなかったと思われる。初唐期の梵漢対音および霞浦文書の音訳讃歌において Skt の v や中世イラン語の[β]の音訳に奉母字は用いられても、微母字が用いられることはない。この点は、8世紀の対音資料において微母字が Skt の v や中世イラン語の[β]に対応し、微母の軽唇音化および脱鼻音化を明瞭に示すのと極めて対照的である。従って、初唐期の微母に Skt の v や中世イラン語の[β]を表すのに十分な摩擦音化や脱鼻音化は生じておらず、[m̥v-]や[v-]ではなかったと推察される。

以上の推論がもし正しいとすれば、初唐期の微母の音価は[m̥-]であったと考えられる。但し、それが果たして明母/m-/の異音であったのか、それともすでに明母から音韻的に分化して微母/m̥-/となっていたのかは分からない。

また仮に微母の音価を[m-]と考えるのであれば、上の「文」および「勿」（いずれも文（物）韻）が例外的に外国語の m に対応する点について説明が必要となる。ひとまず、次の二つの可能性を考えておく。①文（物）韻という条件下では例外的にまだ唇歯音化しておらず[m-]のままであった、②文（物）韻においても[m-]であったが、Skt の mun、中世イラン語の man を表記するのに最も近い発音の字として選ばれ、またチベット文字では mun と表記する他に方法がなかった。

#### 4. まとめ

本稿では初唐期における軽唇音化の問題について、主に梵漢対音と霞浦文書の音訳讃歌を用いて検討を行った。その結果、初唐末期までには軽唇音声母の唇歯音化が進行していたことが、これら2種の資料に共通して確認された。これは資料成立時の発音をより直接的に反映する対音資料の特性を活かした研究の成果と言える。微母は今のところ対音資料において「文」と「勿」の音訳例が得られるのみであるが、少なくともそれら音訳例からは微母の鼻音性が保存されていたことを確認できた。微母全体については、あくまでも間接的な推論に過ぎないが、すでに唇歯音化を開始してはいたが、十分な摩擦音化や脱鼻音化には至っておらず、なお強い鼻音性を保存していた可能性があることを指摘した。

一方で、軽唇音化の問題を論じる上での対音資料による研究の限界も明らかとなった。その限界は対音資料の資料的性質に起因するが、従来の対音資料による研究（主に梵漢対音研究）では十分に意識されていなかったことである。本稿での議論によって、軽唇音化に関する研究および対音資料による唐代音韻史研究の厳密性をより高めることができたと考える。

#### 5. 附論 日母の脱鼻音化

日母は元々鼻音であったが、『切韻』の反切において重紐 A 類との関係が近いことから分かるように、強い口蓋性を有していたため摩擦音化して、唐代以降の北方音では鼻音性を失ったと考えられる。

水谷 1957 は梵漢対音を用いて、7世紀初頭の洛陽においてすでに日母等の脱鼻音化が一部見られたと指摘し、長安ではそれ以前にこの現象が発生していたとの見解を示した。これに対して、橋本 2007 は検証の結果、7世紀の梵漢対音には鼻音声母の脱鼻音化を裏付ける確実な例が見当たらないことを指摘した。だが7世紀の北方音において鼻音声母が脱鼻音化した可能性が完全に否定されたわけではない。特に微母と日母は現代北方方言の多くで鼻音性

を完全に消失させていることから、この両声母が比較的早期に摩擦音化して脱鼻音化した可能性がある。

すでに見たように、初唐期の対音資料には微母の摩擦音化や脱鼻音化を示す例は見られない。では日母はどうだろうか。

日母の摩擦音化および脱鼻音化は音韻変化ではなく、音価上の変化であったに過ぎない。従って反切資料からこの変化を窺い知ることは不可能である。敦煌発見の三十字母には P 2012 『守温韻学残卷』と S 512 『帰三十字母例』の 2 種類があり、両者の声母の種類は同じであるが、日母の配列が異なる。P 2012 では日母が知徹澄の後に置かれ「知徹澄日は舌上音（知徹澄日は舌上音である）」とあるが、S 512 では日母が審穿禪の後ろに置かれている。S 512 における日母の配列について、太田 2013 : 76 は日母が [z] に変化していたことの反映である可能性を指摘している。また敦煌俗文学資料中の別字異文において日母が疑母、影母、以母と通用する（邵荣芬 1963 : 201）のも日母の脱鼻音化を示している。但し、これらの資料はいずれも 8 世紀以降の成立であり、初唐期の日母の音価を論じる上で直接の参考にはならない。日母の脱鼻音化が初唐期に発生していたかどうかは、初唐期の対音資料によって検討する必要がある。

まずは梵漢対音の状況を見てみよう。玄奘訳では日母は Skt の ñ に対応する。jñ にも対応するが、これは jñ が ñ[n] のように読まれていた<sup>31</sup>ことの反映と考えられる（施向东 1983 : 30; 施向东 2009a : 16）。つまり日母の脱鼻音化を示すものとは言えない。菩提流志の洛陽訳<sup>32</sup>でも ñ に対応する（李建強 2017b : 94 ; 李建強 2017a : 17）。また義浄訳では ñ、ny に対応する<sup>33</sup>（Coblin 1991c : 72-73 ; 王思齊 2015 : 258-259）。要するに日母は Skt の鼻音に対応しており、摩擦音化や脱鼻音化の反映は見られない。本稿筆者も今のところ、初唐期の梵漢対音の中に、日母のそのような変化を確実に示す音訳例は確認

<sup>31</sup> jñ の実際の読み方は幾通りか存在した。橋本 2007 : 128 および同論文 : 137、注 11 を参照。また李建強 2017a : 242-251 も jñ の幾つかの読み方について考証を行っている。

<sup>32</sup> 菩提流志の長安訳『不空羼索神变真言经』(T20, No. 1092。神龍三年(707)～景龍三年(709)長安西崇福寺で訳出)では日母字「饒」「惹」が Skt の j に対応する例が見られる(李建強 2017b : 94 ; 李建強 2017a : 90)。

<sup>33</sup> Coblin 1991c : 72 は義浄訳『金光明最勝王经』(T16, No. 665)の音訳に日母字が nj、ñj に対応する例を見出したが、その Skt 語形には問題があり、日母の確実なデータとしては受け入れられない。また『大正藏』所収『金光明最勝王经』の脚注に見える Skt 語形には時折奇妙な表記が見られるので注意が必要である。以上については橋本 2019 : 67 ですでに述べた。更に Coblin 1991c : 73 が ś に対応する日母の例として『金光明最勝王经』より挙げる「毘爾儻」bhiṣini (T16 : 449c23) の対応にも疑問がある。義浄訳が依拠した梵本では問題の語形が bhiṣini ではなく別の語形であった可能性がある。

できていない。

一方、霞浦文書中の漢訳マニ教文献の音訳讃歌では、例えば以下のように日母字「而」を声符とする「𑖦」が中世イラン語の *z* に対応する例が見られる。これらは日母の摩擦音化を示している。

「𑖦哩弗哪<sup>34</sup>」 *jyryft' [z̥rɪft-ā]* 『四寂讃』

「𑖦𑖦」 *bwjyd [bōžēd]* 『四寂讃』

「而」に口偏が付いているのは、「而」の通常の発音とはやや異なる発音を意図している可能性がある<sup>35</sup>。つまり「而」の声母は摩擦音化を生じていたが、なお鼻音性を保存して *[ŋz]* のように発音されており、そのままでは中世イラン語の *[z]* を忠実に表せないため、近い発音の字を借りたという意味で口偏を付けたと思われる。とは言え、以上の音訳例から「而」の声母がもはや純粋な鼻音でなかったことは確かである。

また霞浦文書の音訳讃歌が依拠した北方音では、日母と微母の脱鼻音化の時期が同時でなかったことも知られる。時代はやや下るが、トゥルフアン出土文書『唐開元二十一年（公元733年）染勿等保石染典往伊州市易弁辞』に見えるソグド人名 *Zhēmat* の音訳「染勿」<sup>36</sup>では、日母字「染」がソグド語の *zh (=ž [ʒ])*<sup>37</sup>に、微母字「勿」が *m* にそれぞれ対応している。これも日母が微母より一足早く摩擦音化し、脱鼻音化を開始していたことを示す例であるかもしれない。

では、なぜ日母の摩擦音化ないし脱鼻音化を示す例が初唐期の梵漢対音には見えず、霞浦文書の音訳讃歌にのみ見られるのであろうか。この点については、マニ教が中国に伝来したばかりの新しい外来宗教であり、訳経の伝統を持たなかったことが関係していると思われる。マニ教經典の漢訳が行われるようになったのは初唐末期の頃からであり、霞浦文書の音訳讃歌の原本は正にこの時期に成立している。そのため、当時の北方音に生じていた新しい特徴が反映されやすかったのではないだろうか。

<sup>34</sup> 「哪」は「𑖦」の誤写である可能性が高い。吉田 2016b : 30 および同論文 : 39、注 27 を参照。

<sup>35</sup> 口偏を付けることによって、その字がただ発音のみを示し、漢語としての意味を持たない字であると注意を喚起する意図もあったと思われる。

<sup>36</sup> 国家文物局古文献研究室等(編)1990 :44。ソグド人名 *Zhēmat* は Yoshida and Kageyama 2005: 306 を参照。

<sup>37</sup> ソグド文献学式の表記では *ž* の有気音という意味で *z* を使い、簡略表記では *sh* を真似て *zh* と記されるとのこと。ソグド語のローマナイズ表記とその音価の関係についてご教示くださった吉田豊先生に感謝申しあげる。

梵漢対音と霞浦文書の音訳讃歌における日母の現れ方の違いを地理的変種の差として説明可能であるかは疑問である。初唐期の仏典の漢訳作業は主に長安と洛陽で行われていた。よって、この頃の漢訳仏典の音訳が依拠したのは当時の長安と洛陽の仏教界において主流とされた北方音の一種であったに違いない。初唐末期頃におけるマニ教経典の漢訳が行われた場所についての手掛かりは得られないが、長安や洛陽以外の地域を想定することは難しいと思われる。また、霞浦文書の音訳讃歌における全濁音、鼻音、重唇音、軽唇音の対応状況は、初唐期の梵漢対音の状況とよく符合していることから、日母の音価の違いを除くと、両者の依拠した音韻体系は基本的に同じであったと考えられる。従って、梵漢対音と霞浦文書の音訳讃歌における日母の現れ方の違いは、同一方言における内部差異によるものと解釈しておくのが現時点では無難であろう。

ところで、河野 1954 は、中国北方における微母と日母の脱鼻音化が唐代長安音における鼻音声母の脱鼻音化を通して可能となったとし、唐代以後に字音の基盤が長安音を離れてから他の鼻音声母は鼻音に戻ったものの、微母と日母のみは脱鼻音化を保持または進行させたと考えた(河野 1954:249-250)。だが霞浦文書の例から、少なくとも日母は、唐代長安音の体系的な脱鼻音化とは無関係に脱鼻音化することがあったと分かる。これによって、現代北方方言において日母の脱鼻音化が非常に広く見られるのは、必ずしも唐代長安音の影響によるものとは限らず、むしろ長安以外の地域において日母が比較的早く脱鼻音化していたことの反映である可能性を検討する必要性が生じた。

一方、微母の脱鼻音化を示す音訳例は初唐期の資料に確認することができない。また 8～10 世紀の対音資料の多くが長安音を含む西北方言音を反映するものに偏っているため、西北以外の地域における微母の状況を直接観察することは困難である。しかしながら、日母の例から類推するならば、8 世紀以降の中国北方における微母もまた、唐代長安音の体系的な脱鼻音化とは関係無く脱鼻音化していた可能性は十分にあると思われる。

## 参考文献

### 日本語文献（五十音順）

- 池田温 1965. 「8 世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」, 『ユーラシア文化研究』1: 49-92 頁。
- 石見清裕 (編) 2016. 『ソグド人墓誌研究』。東京: 汲古書院。
- 大島正二 1971. 「顔師古漢書音義の研究 (下)」, 『北海道大学文学部紀要』19(4): 1-85 頁。

- 大島正二 1985. 「曹憲『博雅音』考—隋代南方字音の一樣相（下）声類・韻類について—」, 『北海道大学文学部紀要』34(1):47-81 頁。
- 大島正二 1987. 『唐代字音の研究』。東京：汲古書院。
- 太田斎 1998. 「玄応音義に見る玉篇の利用」, 『東洋学報』80(3):1-23 頁。
- 太田斎 2013. 『韻書と等韻図 I』神戸市外国語大学研究叢書 52。神戸：神戸市外国語大学外国学研究所。
- 太田斎 2019. 「『玄應音義』反切と『切韻』反切—中古效攝所屬字の分析」, 『日本中国学会報』71:45-59 頁。
- 狩野充徳 2000. 『文選音決の研究』。広島：溪水社。
- 辛嶋静志 1994. 『「長阿含經」の原語の研究—音写語分析を中心として』。東京：平川出版社。
- 河野六郎 1937. 「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」。卒業論文。東京：東京帝国大学。河野 1979:3-154 頁。
- 河野六郎 1954. 「唐代長安音に於ける微母に就いて」, もと『中国文化研究会会報』4(1)。河野 1979:249-259 頁。
- 河野六郎 1979. 『河野六郎著作集』2。東京：平凡社。
- 田久保周誉 1972. 『梵文孔雀明王經』。東京：山喜房仏書林。
- 塚本善隆（編纂）1954. 『望月仏教大辞典』（増訂版）第5巻。東京：世界聖典刊行協会。
- 橋本貴子 2007. 「陀羅尼の音写字から見た次濁鼻音の非鼻音化について」, 『中国語学』254:124-142 頁。
- 橋本貴子 2019. 「対音資料から見た初唐期の匣母の音価について—義浄の音訳漢字を中心に—」, 『開篇』37:67-80 頁。
- 平山久雄 1967. 「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」, 『北海道大学文学部紀要』15(2):184-242 頁。
- 水谷真成 1957. 「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」, 『東洋学報』39(4):337-367 頁。
- 水谷真成 1959. 「慧苑音義音韻攷 —資料の分析—」, 『大谷大学研究年報』11:143-221 頁。
- 吉池孝一 2008. 「北周墓誌の粟特語（ソグド語）音訳漢字」, 『KOTONOHA』69:10-17 頁。
- 吉田豊 1986. 「漢訳マニ教文献における漢字音写された中世イラン語について（上）」, 『内陸アジア言語の研究』2:1-15 頁。
- 吉田豊 1989. 「ソグド語の人名を再構する」, 『三省堂ぶっくれっと』78:66-71 頁。

吉田豊 1994. 「ソグド文字で表記された漢字音」, 『東方学報』66: 271-380 頁。

吉田豊 2016a. 「西安出土北周“史君墓誌”ソグド語部分訳注」, 石見 (編) 2016: 61-80 頁。

吉田豊 2016b. 「唐代におけるマニ教信仰 —新出の霞浦資料から見えてくること—」, 『唐代史研究』19: 22-41 頁。

#### 中国語文献 (ピンイン順)

大正一切経刊行會 1924-1932. 《大正新脩大藏經》全 88 卷。東京：大藏出版。(略称：大正蔵または T)

丁鋒 1995. 《博雅音》音系研究。北京：北京大学出版社。

国家文物局古文献研究室, 新疆维吾尔自治区博物馆, 武汉大学历史系 (編) 1981. 《吐鲁番出土文书》3。北京：文物出版社。

国家文物局古文献研究室, 新疆维吾尔自治区博物馆, 武汉大学历史系 (編) 1990. 《吐鲁番出土文书》9。北京：文物出版社。

黄淬伯 1931. 《慧琳一切經音義反切攷》, 國立中央研究院歷史語言研究所專刊 6。北平：國立中央研究院歷史語言研究所。

吉田豊 2014. 《霞浦摩尼教文書〈四寂讚〉及其安息語原本》, 《國際漢學研究通訊》9: 103-121 頁。

季羨林等 (校注) 1985. 《大唐西域記校注》。北京：中華書局。

李方, 王素 (編) 1996. 《吐鲁番出土文书人名地名索引》。北京：文物出版社。

李建强 2015a. 《菩提流志译〈不空罽索咒心经〉〈护命法门神咒经〉咒语对音研究》, 《语言研究》35(2): 53-62 頁。

李建強 2015b. 《提雲般若譯〈智炬陀羅尼〉咒語對音研究》, 《西域歷史語言研究集刊》8: 225-234 頁。

李建强 2017a. 《敦煌对音初探 —基于敦煌文献的梵藏汉对音研究》。北京：中国社会科学出版社。

李建強 2017b. 《菩提流志主譯〈不空罽索〉咒語聲母對音比較研究》, 《语言科学》16(1): 89-99 頁。

林悟殊 2016 a. 《霞浦抄本夷偈〈四寂讚〉釋補》, 《文史》2016(1): 169-200 頁。

林悟殊 2016b. 《霞浦抄本夷偈〈明使讚〉《送佛讚》考釋 —兼說霞浦抄本與敦煌吐魯番研究之關係》, 《敦煌吐魯番研究》16: 137-154 頁。

林悟殊 2016c. 《霞浦抄本“土地贊”夷偈二首辨釋》, 《西域研究》2016(4): 70-82 頁。



- 林悟殊 2016d. 《霞浦鈔本夷偈〈天女呪〉、〈天地呪〉考察，《絲瓷之路：古代中外關係史研究》5：109-139 頁。
- 刘广和 1984. 《唐代八世紀长安音声紐》，《语文研究》1984(3)：45-50 頁。
- 刘广和 1994. 《〈大孔雀明王經〉咒语义淨跟不空译音的比较研究—唐代中国北部方音分歧初探》，《语言研究》1994 年增刊：408-414 頁。
- 刘广和 2002. 《音韵比较研究》。北京：中国广播电视出版社。
- 龍異騰 1998. 《從唐代史書注解反切看輕重唇音的分化》，《漢語史研究集刊》1（下）：368-383 頁。
- 苗昱 2005. 《〈华严音义〉研究》，博士学位论文。苏州：苏州大学。
- 苗昱, 陶家骏 2005. 《〈华严音义〉声类考》，《苏州大学学报》，2005(2)：74-77 頁。
- 潘悟云 1983. 《中古汉语轻唇化年代考》，《温州師专学报》（社会科学版）1983(2)：21-26 頁。
- 平山久雄 2006. 《關於輕唇音產生的幾個問題》，《中國語言學集刊》1(1)：15-25 頁。
- 邵荣芬 1963. 《敦煌俗文学中的别字异文和唐五代西北方音》，《中国语文》1963(3)：193-217 頁。
- 邵荣芬 1964. 《〈五经文字〉的直音和反切》，《中国语文》1964(3)：214-230 頁。
- 施向东 1983. 《玄奘译著中的梵汉对音和唐初中原方音》（摘要），《语言研究》1983（1）：27-48 頁。
- 施向东 2009a. 《玄奘译著中的梵汉对音和唐初中原方音》（全文），施向东 2009b：1-79 頁。
- 施向东 2009b. 《音史寻幽——施向东自选集》。天津：南开大学出版社。
- 太田斋 1999. 《“蜘蛛”的“网”——微母字特殊演变例》，《汉语现状与历史的研究 首届汉语语言学国际研讨会文集抽印本》：287-296 頁。北京：中国社会科学出版社。
- 王邦維（校注） 1995. 《南海寄歸內法傳校注》。北京：中華書局。
- 王怀中 2006. 《〈经典释文〉陆氏反切唇音声母考》，《中国语文》2006(5)：433-440 頁。
- 王力 1980. 《玄应一切经音义反切考》，《湖北大学学报》哲学社会科学版 1980(3)：18-24 頁。
- 王思齊 2015. 《義淨譯〈佛說大孔雀明王經〉中的唐代北方方言聲母系統》，《西域歷史語言研究集刊》8：257-264 頁。
- 王曦 2016. 《玄应〈一切经音义〉唇音声母考察》，《中国语文》2016(6)：709-725

頁。

尉迟治平 1982. 《周、隋長安方音初探》，《语言研究》1982(2)：18-33 頁。

線裝書局（影印） 2004. 《高麗大藏經》58。北京：線裝書局。

中華大藏經編輯局（編） 1993. 《中華大藏經》漢文部分 61。北京：中華書局。

周法高 1984. 玄應反切再論，《大陸雜誌》69(5)：197-212 頁。

周祖謨 1936. 《萬象名義中之原本玉篇音系》，畢業論文。北京：北京大學。

周祖謨 1966：270-404 頁。

周祖謨 1966. 《聞學集》上冊。北京：中華書局。

#### 欧文文献（アルファベット順）

Bi, Bo., Sims-Williams, Nicolas., and Yan, Yan. 2017. Another Sogdian-Chinese Bilingual Epitaph. *Bulletin of SOAS* 80(2): 305-318.

Boyce, Mary. 1975. *A Reader in Manichaean Middle Persian and Parthian* (Acta Iranica 9). Leiden: E.J. Brill.

Brough, John. 1973. I-ching on the Sanskrit Grammarians. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 36(2): 248-260.

Coblin, W. South. 1991a. *Studies in Old Northwest Chinese* (Journal of Chinese Linguistics, Monograph Series No.4). Berkeley: Project on Linguistic Analysis, University of California.

Coblin, W. South. 1991b. Thoughts on Dentilabialization in the Tang-Time Dialects of Shazhou. *T'oung Pao* 77(1): 88-107.

Coblin, W. South. 1991c. A Survey of Yijing's Transcriptional Corpus (义净梵汉对音探讨). 《语言研究》1991(1): 68-92.

Hansen, Valerie. 2005. The Impact of the Silk Road Trade on a Local Community: The Turfan Oasis, 500-800. de la Étienne Vaissière and Éric Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*. Paris: École française d'Extrême-Orient. 283-310.

Kasai, Yukiyo. 2014 The Chinese Phonetic Transcriptions of Old Turkish Words in the Chinese Sources from 6th-9th Century: Focused on the Original Word Transcribed as Tujue 突厥, 『内陸アジア言語の研究』29: 57-135.

Karashima, Seishi. 2001. *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典. 東京：創價大學國際佛教學高等研究所。

Ma, Xiaohe., and Wang, Chuan. 2018. On the Xiapu Ritual Manual Mani the Buddha of Light. *Religions* 9(7), 212: 1-40.

<https://www.mdpi.com/2077-1444/9/7/212/pdf>. (accessed 2019/01/29)

Maspero, Henri. 1920. Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. *Bulletin de*

*l'École française d'Extrême Orient* XX: 1-124.

Yoshida, Yutaka. 2018. Appendix A by Y. Yoshida. *Ma and Wang* 2018: 35-36.

Yoshida, Yutaka., and Kageyama, Etsuko. 2005. Sogdian names in Chinese characters, Pinyin, reconstructed Sogdian pronunciation, and English meanings. *Hansen* 2005: 306.

Keywords: 唐代 輕唇音化 微母 日母 脫鼻音化